

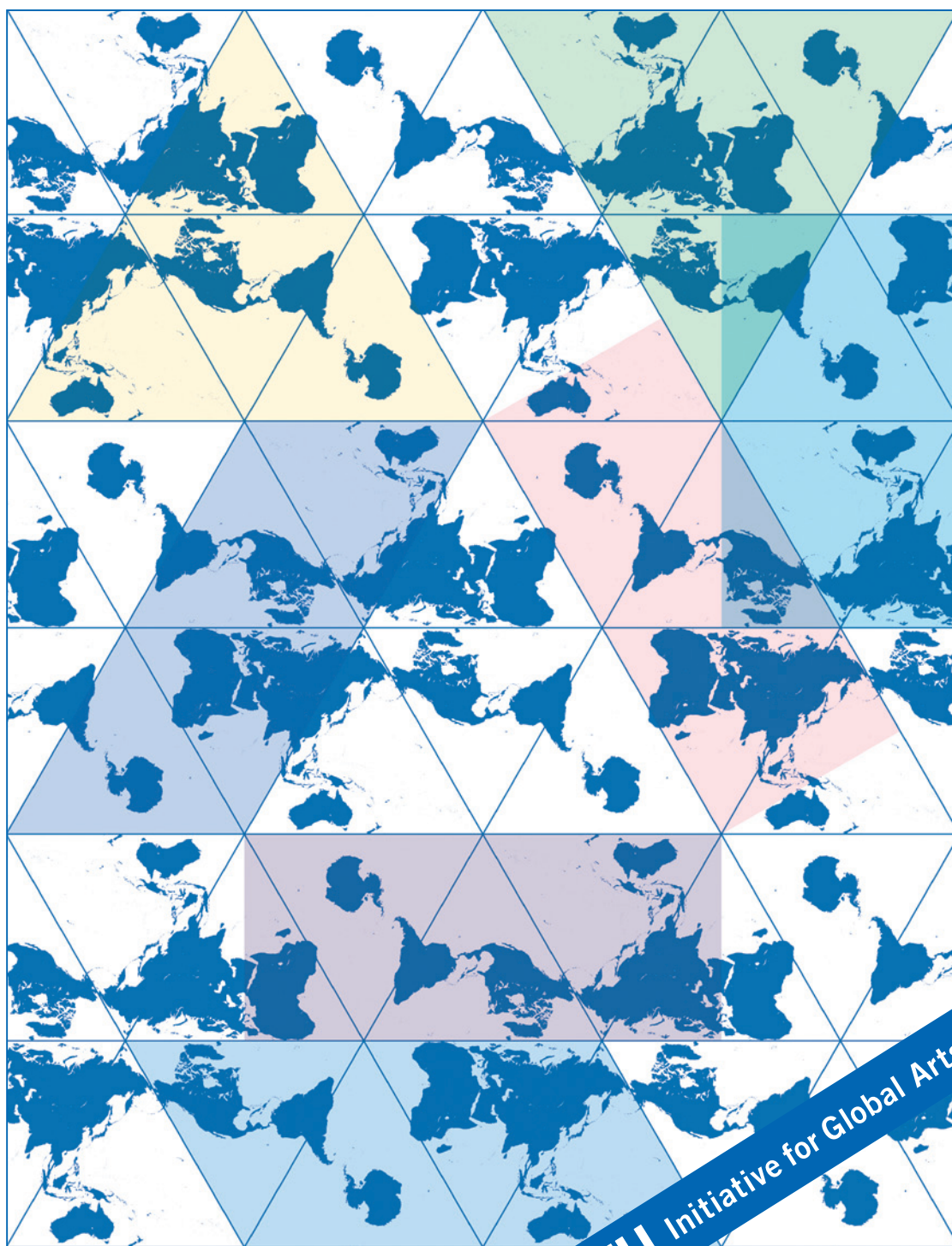
YNU

VOL. 190

YOKOHAMA National University
Public Relations Magazine

横浜国立大学 広報誌

横浜国大の「国際性」——世界で活躍する人材を育てる



YNU Initiative for Global Arts & Sciences

Contents

03 横浜国大の「国際性」

YNU Initiative for Global Arts & Sciences

① APEC 開催に向けて

[INTERVIEW]

椛島洋美 大学院国際社会科学部 准教授

② 世界で活躍するYNU研究者

石川正弘 大学院環境情報研究院 准教授

後藤敏行 大学院環境情報研究院 教授

田村直良 大学院環境情報研究院 教授

[INTERVIEW]

山崎圭一 経済学部国際経済学科 教授

③ YNUの国際戦略

[INTERVIEW]

松岡和久 理事(国際担当) 国際戦略推進室長

10 [研究室探訪]

小ヶ谷千穂

教育人間科学部国際共生社会課程 准教授

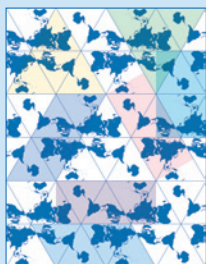
丸尾昭二

大学院工学研究院 准教授

12 CAMPUS NEWS

14 主なメディア掲載情報(2009年12月～2010年9月)

グローカルレポート



〈表紙〉AuthaGraph / オーサグラフ

メルカトル図法など、これまでの地図の欠点を補い、陸地の面積比をほぼ正確に表記し、かつ海を分割することなく四角の平面に収めた世界地図。建築家の鳴川肇氏が開発した。

地球の表面積を96等分し、それらの面積比を保ちながら正四面体に変換して作成する。正四面体を展開させた地図はシームレスに無限につなぐことができ、地図上の様々なポイントを中心に三角形、平行四辺形、長方形等の世界地図を切り取ることができる。

(※三角グリッドが4つ分で世界地図1枚となる)

名称はauthalic(面積が等しい)とgraph(図)に由来する。

www.authagraph.com

copyright ©2010 AuthaGraph Co., Ltd. All Right Reserved.



横浜国大の「国際性」

世界的な港湾都市・横浜生まれ、
国際交流の先駆校として知られるYNU。
「国際性」を基本理念の1つに掲げ、
800人もの留学生を受け入れています。
短期・長期の留学に出る学生も多く、
国際的な研究交流も盛んです。
YNUの国際性を探りました。



アジア太平洋地域の『新しい』 リージョナリズムをAPECから考える

梶島洋美 大学院国際社会科学研究科 准教授

聞き手／永濱 翔（大学院国際社会科学研究科博士課程前期 2年）

議長国日本に期待される 今後のAPECの方向性

—— 梶島先生が取り組まれている「政治学の立場から扱うリージョナリズム」とはどのようなものでしょうか。

私が研究しているリージョナリズムとは、物やお金、人がボーダレスに行き来している相互依存の状況の中で、国家を横断するシステムを政府同士の取り決めで制度化しようとする動き（地域主義）のことです。アジアのAPEC（※1）やASEAN+3（※2）、ヨーロッパのEU（※3）などは、その具体例。国家間の力関係や各国の思感の変化によって、アジアのリージョナリズムがどのように進展あるいは停滞するのかを理論的に分析しています。

EUでは、条約等を整備し、守らない場合は強制的に履行するような措置が執られます。一方、APECは紳士協定のため、実

行が伴わないと批判されがちです。しかし、感染症やテロなど個別の具体的問題で、連携できるところは歩み寄っています。ドロップアウトするメンバーもなくアジアがひとつにまとまることができるのは、縛りがないからこそではないかと考えています。

さらに、APECやASEAN+3など多国間の中での2国間関係にも着目しています。1990年代の終わりから、日中関係、日韓関係は悪化しているにもかかわらず、APECやASEAN+3は成果を上げていました。それはなぜなのか、そこに今後の日本の安定的外交を構築するヒントを得ようと思っています。

—— 今年横浜で開催されるAPECについて、組織や活動内容、注目点を教えてください。

APECは、1989年に発足した政府間のフォーラムで、21の国と地域で構成され、貿易と投資の自由化、貿易と投資の円滑化、

経済技術協力を3つの柱としています。アジア太平洋地域の持続可能な成長を目指し、毎年首脳会議や経済閣僚会議のほか、財務、環境、保健など分野別担当大臣会合、各種作業部会、専門家会合、関係者会合などが開催されます。

前述のような批判もありますが、WTO（※4）の動きをアシストするひとつの地域枠組みとして、先進国と途上国が含まれているAPECは、非常に注目されています。たとえば、貿易と環境、貿易と労働などは、先進国と途上国の間で対立しやすく、WTOでは容易に合意できない問題です。APECなら、これらの問題も何らかの形で合意し進めることができるのではないかと期待されているのです。

今年の注目点は、「先進国は2010年、途上国は2020年までに貿易と投資の自由化を達成する」と定めた1994年のボゴール目標を、先進メンバーがどの程度達成できたのが評価されます。もうひとつの焦点は、APECの枠組みで、FTA（※5）を結べるかどうかです。

—— 日本の果たすべき役割や、APECの発展可能性については、どうお考えでしょうか。

議長国である日本は、先進国の代表として、ボゴール目標をどのように達成できたのか、あるいはどこで躓いたのか明らかにすることが課されています。2010年は終わりではなく、むしろこれをきっかけにアジア太平洋の経済をどう進めていくのか、今後の方向性を打ち出す出発点でもあるのです。

FTAの締結は、厳しい法的拘束力を伴うため、途上国側にとっては厳しい結果にな



聞き手の永濱さんは梶島先生のゼミ生。フィリピンでのフィールドワークの経験がある



Hiromi Kabashima

1971年福岡県生まれ。博士(法学)。九州大学大学院法学研究院助手を経て、2003年より現職に。専門は政治学。特に国際関係論。アジア太平洋の地域ガバナンスの研究に従事している。著書として、出水 薫・梶島洋美ほか編『先進社会の政治学』(法律文化社)など。



ります。日本は、FTAの重要性をふまつつも途上国経済にも配慮するバランスとしての役割を期待されています。ただし、玉虫色の結果ではなくリーダーシップを取するような形で進めていくことが重要です。そのためには、アジア太平洋に向かう日本としての理念を明確にして臨む必要があります。日本は、環境問題や人間の安全保障、いわゆるテロや感染症、食糧問題など、身近な安心安全をふまえた上での経済の成長戦略を打ち出すのではないのでしょうか。

APECは、政府関係者が繰り返し顔を合わせ、信頼関係が構築されています。国際的なパワー関係を持ち込まず、平等な参加と相互信頼にもとづいたAPECは、新しい政策や2国間協定の基盤、さらに世界的合意への足がかりとして、今後も充分な発展可能性を秘めています。

多様な価値観に触れて 柔軟な思考と自己の確立を

—— APECと関連して、横浜国大生にはどんなことを期待しますか。大学が取り組んでいる国際的人材養成プログラムについても聞かせてください。

APEC開催期間中は、世界中からNGOやジャーナリストなど約1万人が訪れるので、積極的に話しかけて自分の思いを伝えてみましょう。

本学では、国際教育シャトルベース事業を展開し、海外協定校との間で多くの留学生の受け入れと派遣を積極的に行っています。永濱君(＝聞き手)がフィールドワークの拠点にしたフィリピンのサントーマ

ス大学は、来年400周年を迎えるアジア最古の大学ですが、本学から院生を毎年10数名派遣しています。学生は大学で合同セミナーを行なうほか、アジア開発銀行やフィリピン政府省庁で意見聴取を行い、研究テーマに生かしていますね。

—— はい、母校に戻った後も多彩な国の広い世代の留学生とともに学んでいます。やがて自国の未来を背負うような友人と、専門分野から生活レベルのことまで率直に話せて、信頼関係も生まれています。

さまざまな価値観があって、それがあたりまえなのだというのを若いうちに経験し、思考の柔軟性を養ってほしいですね。同時に、自己の確立も重要です。

—— スポンジみたいに吸収するけれど自分の形は崩れない、ということですね。本日はありがとうございました。

脚注

- (※1) APEC…アジア太平洋経済協力
- (※2) ASEAN+3…地域交流の緊密な東南アジア諸国連合(ASEAN)と日本、中国、韓国で協力していく枠組み
- (※3) EU…欧州連合
- (※4) WTO…世界貿易機関
- (※5) FTA…国や地域の間で関税を撤廃し、モノやサービスの自由な貿易を一層進めることを目的とした自由貿易協定



横浜でAPEC(アジア太平洋経済協力)が開催されます

▶ www.apec2010.go.jp

日本政府は、本年11月に開催予定の日本 APEC(アジア太平洋経済協力)首脳及び閣僚会議場をパシフィコ横浜(横浜市西区)としました。また同施設内に国際メディアセンターを併設することとしました。

横浜での開催スケジュール

11月7日-8日	最終高級実務者会合(CSOM)
11月8日-11日	第4回ABAC会議
11月10日-11日	第22回APEC閣僚会議
11月11日	APEC中小企業サミット
11月12日-13日	APEC CEOサミット
11月13日-14日	第18回APEC首脳会議

横浜国大の「国際性」—— ② 世界で活躍するYNU研究者

研究室から飛び出せ—— ワールドワイドに活躍するYNU研究者たち

多くのYNU研究者が世界各地をフィールドに活躍しています。また海外の大学や研究機関との共同研究や共同調査も盛んです。研究者にとっては「世界がステージ」なのです。

南極観測 地球ダイナミクスをフィールドから探求：南極から熱帯まで



地震発生等の固体地球ダイナミクスを理解する上で、地殻物質とその物性を理解することは重要ですが、地殻深部を直接その場で観察することは現代の科学技術では不可能です。そこで私はかつての地殻深部物質が地表に露出する地域に着目し、世界各地の大陸・弧状列島・山脈において地質調査を行っています。調査地域は極域から熱帯、平原から大山脈まで様々です。主な地域は、南極大陸、マダガスカル共和国、オマーン国、カザフスタン共和国、パキスタン・イスラム共和国（ヒマラヤ山脈）、中華人民共和国、インドネシア共和国（ティモール島）です。最近では2009年11月～2010年2月まで南極セールロンダーネ山地にて調査を行いました（左写真）。3カ月間、スノーモービルで移動しながら氷上でのテント生活。クレバスあり、ブリザードあり、体感温度は-40℃まで下がります。南極での地質調査は現代でも探検的要素が大きいです。

石川正弘 Masahiro Ishikawa
大学院環境情報研究院 准教授

1967年生まれ。理学博士。東北大学大学院理学研究科博士課程を修了後、現職に。専門は地質学／地球表層ダイナミクスなど。



点字楽譜 BrailleMUSEという点字楽譜の自動翻訳システムを開発

▶ gotoh-lab.jks.ynu.ac.jp/braille_music_score/

点字楽譜は、約200年前にLouis Braille（フランス）によって考案された視覚障害者のための楽譜です。点字楽譜の表記には文書点字と同じ6点点字を使い世界共通ですが、供給面の問題がありました。我々が開発したBrailleMUSEというシステムは、ネット上に普及している電子楽譜を点字に自動翻訳するもので、ユーザ所有の電子楽譜はもちろん、電子楽譜を公開するサイトと連携させて、点字楽譜に翻訳しながらユーザに提供する機能を備えています。現在、日本語、英語、スペイン語、ポルトガル語のホームページを通じて世界に向けて自動翻訳機能を公開しており、日本語版が350～400件／月、外国語版が50～100件／月の利用があります。詳しくは上記のURLをご覧ください。最近の話題として、日本テレビ24時間テレビで視覚障害者が参加した「『旅立ちの時コンサート』再び!」で使用した点字楽譜の作成にBrailleMUSEが活躍しています。



後藤敏行 Toshiyuki Gotoh
大学院環境情報研究院 教授

1952年生まれ。工学博士。東京工業大学大学院総合理工学研究科博士課程後期修了後、富士通研究所、本学工学部教授を経て現職に。専門は画像処理、コンピュータビジョン、福祉情報工学。



田村直良 Naoyoshi Tamura
大学院環境情報研究院 教授

1956年生まれ。東京工業大学大学院理工学研究科情報工学博士課程前期修了後、東京工業大学工学部助手、本学工学部教授を経て現職に。専門は新聞記事等の解析、それによる意味情報抽出に関する研究。



[INTERVIEW]

MPEプログラム 全世界の税務職員の質の向上に貢献する

聞き手／広報・渉外室

—— MPE (Master's Program conducted in English) プログラムの始まりを教えてください。

山崎: 1994年に発展途上国政府のインフラ整備関係の技術系幹部職員を対象としたインフラストラクチャー管理学修士課程が始まりました。これは世界銀行(以下、世銀)のプログラムで、全学で運営する修士課程であり、私は経済学部から全学準備委員会に派遣されて企画段階から関わっています。1996年に大学院の経済学研究科(当時)で、発展途上国の財務省の若手幹部候補生を対象とした本課程を立ち上げました。当初から日本の大蔵省(当時)の国税庁税務大学校の国際研修事業と連携し、院生は週1回、そこで約1年半の実践的な研修を受けています。内容は「公共政策と租税(Public Policy and Taxation)」と、略してPPTと呼んでいます。その後1999年に、インドネシア政府の奨学金制度として、同国財務省職員のみを対象とした修士課程が世銀のPPTにドッキングする形で開講しました。IGS (Indonesian Government Scholarship) プログラムです。さらに2006年に、1年目はインドネシアの大学、2年目が本学で学ぶILP (Indonesia Linkage Program) という日本初の修士課程も加わりました。

—— 今までに何人が修了したのですか。

2010年の3月および9月の修了生10名を含めて、100人です。出身国は、東欧、アフ

カ、西アジア、南アジアなど全世界にわたり、31ヵ国に及びます。西アフリカの修了生が国税庁の長官に就任するなど、各国税務当局の幹部として活躍しています。税務の近代化は、税収の増大を通じて各国経済と財政の自立化につながります。

例えば、世銀や日本からの借金もよいのですが、それではどうしても対外債務が膨張します。他方途上国の国内には、まだ「眠っている」余剰があります。それは、租税負担を違法に避けている特権層であり、脱税者への課税は社会的正義の観点と各国の財政力を高める上でも重要です。MPEは、途上国の人材育成と経済的自立に貢献するプログラムだと思います。

—— ここで院生にも感想を聞いてみましょう。

ユディ ヘルディアン(インドネシア): MPEは、大学と国税庁から構成され、バランスがとれたプログラムです。納税者と徴税サイドの複眼的アプローチで租税制度をみつめなおす機会になります。それと横浜というロケーションがありがたいです。生活費の高い東京より、横浜のほうが暮らしやすいですし、また東京に出ることも容易で、勉学をする上で最善の場所だと思います。



ワンディ ドゥルギェル(ブータン): 日本にきての感想は3つです。第1に、日本はこれほど工業化・近代化しているのに、伝統文化が強く維持されていること。第2に、美しく平和な国だということ。人々は外国人に対して親切です。第3に、日本人は何事にもきっちりしていること。これは本当に外国人が学ぶべき教訓です。今後ずっと日本に恩を感じ続けたいと思います。



山崎圭一

Keiichi Yamazaki
経済学部国際経済学科 教授

1962年生まれ。大阪市立大学大学院経営学研究科博士課程後期を単位取得退学後、1993年本学に赴任。2003年から現職。専門は経済政策。特にブラジルの地域経済と環境問題の実証研究。



協定校からの短期留学生と
多言語・多文化コミュニケーション

留学生とお昼を食べながら 外国語でおしゃべり トークタイム

「Talk Time」は英語圏・韓国・ロシアの協定校からの短期留学生が母語を教えながら日本人学生と交流するスペースです。お昼を食べながらネイティブスピーカーと話せる機会となっており、2010年前期は8カ国(イギリス、アメリカ、カナダ、ニュージーランド、オーストラリア、スウェーデン、韓国、ロシア)20名の交換留学生(JOY、JOY/Jプログラム)と約30名の日本人学生が参加しました。

日本人学生と留学生の交流スペース

留学生センター105室

留学生センター1階105室(通称いちまるご)は、毎日11:30~14:30の間、日本人学生や先輩留学生が留学生との交流・相談活動を行っています。日本語会話の相手や日本語や生活についての相談などにも気軽に応じるとともに、楽しくおしゃべりやゲームをしたり、一緒にお昼ご飯を食べたりして過ごしています。履修相談や部活・サークル情報の提供、図書の貸し出しも行っています。また、キャンパスツアー、ウェルカムパーティ、BBQパーティ、交流合宿などの行事も開催しています。



世界に開かれた大学に 学生は一度は海外に出てほしい

国際プロジェクトの経験豊かな松岡理事(国際担当)を迎え、
「実践的学術の国際拠点」を目指すYNUの国際戦略について学生が取材しました。

松岡和久 理事(国際担当) 国際戦略推進室長

聞き手／加地礼佳(教育人間科学部国際共生社会課程 2年)

留学生1000人を目指す

—— 松岡理事が携わってこられた国際事業
について教えてください。

大学で土木工学を学んだのち、国際協力機構(JICA)に入りました。アラブ首長国連邦(UAE)での海図作成を皮切りに、アフリカ横断道路など、80カ国、100以上のプロジェクトに関わりました。

役員になってからは、地域ではアフリカ、分野では経済社会インフラ、医療、教育分野、青年海外協力隊や緊急援助隊を担当しました。

現在は、YNUのほか、日本国際協力センター(JICE:開発途上国の人材育成支援を通じて国際貢献する財団法人)の理事長や、日本国際協力システム(JICS:ODAのうち主に無償援助協力や技術協力関連事業のための資材調達やとりまとめなどを行う財団法人)の理事として、日本の国際支援に関わっています。

—— そういったご経験をYNUではどのように
に生かそうとお考えですか。

まず、YNUが2008年に策定した国際戦略に従って、現在800人の留学生を1000人ぐらいいまで増やしたいですね。交流事業に携わって感じるの、受け入れ態勢を整えることの重要性です。留学だけでなく、数週間や数カ月の学生・研究者等の短期交流などにも積極的に取り組みたいですね。

新規性のある特別プログラムも作りたいです。例えば、アジアの障がい者関連の先生の研修受け入れも考えています。障がい



わかりやすく丁寧に説明いただいた松岡理事と、聞き手の加地さん。加地さんからは、学生ならではの質問が飛び出し、盛り上がった

者の人材育成はとても重要です。

国際交流をもっと実施するためには、政府の予算に頼るだけではなく、さまざまな財源が必要です。YNUは他の大学に先駆けて、世界銀行や国際通貨基金(IMF)からの留学生を受け入れてきました。つまり、国際協力実践の素地はあります。しかし、資金は待っていてもやって来ません。財源確保のために打って出る営業努力が必要です。

—— YNUが力を注いでいる国際教育シャトル
ベース事業について教えてください。

この事業では、世界から優秀な学生を集めるとともに、学生派遣等の拡充を通じ、地球規模の人材交流育成に貢献するという目標をかかげています。「シャトル」とは、機織り機の横糸を通すために左右に受け渡すすのことです。YNUの学生や海外からの留学生、双方の研究者等が派遣や受け入れで、すのように行ったり来たりしながら未来に向けた有効なネットワークという織物

が出来上がっていくイメージです。YNUが日本有数のグローバルな教育拠点(ベース)となる、というプロジェクトです。

日本は国家戦略として、留学生30万人を受け入れ、国際的に活躍できる人材の育成を目指しています。YNUは全学一丸となって、世界に認知される開かれた実践的学術の国際拠点作りを目標としています。そのコアとなるのが、国際教育シャトルベース事業なのです。

英語による授業だけを履修して卒業できるプログラムをはじめ、さまざまな取り組みを推進しています。

学生からの声があがると 大学も動きやすい

—— キャンパスで留学生をよく見かけます。
もっと留学生と交流したいです。私も留学したいですが、就職活動もあり難しいです。

海外に出るための方法や実例は多いです。

それを学内に伝えるのが我々の役目です。
大学のウェブサイトを見てほしいですね。

幸い、留学生センターには各国から来た
留学生が集まっていますし、さまざまな情
報も集まっています。積極的に活用してほ
しいと思います。昼休みに実施している
「トークタイム」は、留学生センターを飛
び出し、今では経済や経営学部のラウンジ
でも行っています。

学生さんからいろいろな声があがってく
ると、大学も動きやすいので、ぜひ声をあ
げてください。私も意見交換の機会をどん
どん増やし、学生さんの声に耳を傾けたい

と考えています。

—— 学生にはどんなことを期待していますか？

海外青年協力隊に参加した若者は、行く
前とは大きく変わります。日本の伝統・文
化を再評価する人になって帰ってきます。
外から見ることで、日本の良さがわかるの
ですね。派遣先ではたった1人の日本人と
していろいろ聞かれます。現地では日本の
代表であり、私設外交官でもあるのです。
厳しい時代環境なので就職活動も大変で

しょうが、長い人生の中で、是非一度は海
外に出てほしいと思います。その経験は、
他では得られない人生の宝になるでしょう。

—— 本日はありがとうございました。



Kazuhisa Matsuo

日本国際協力センター理事長
(2008年～)。1970年海外技術
協力事業団(現国際協力機構)
入構。2010年からYNU理事を
兼任。

日本有数のアカデミックな国際拠点へ

■ 国際教育 シャトルベース

YNU発の理論によって緑を復活させたキャンパスに世界から才能が集まり、切磋琢磨しつつ感性を高める一。
これがYNUがめざす「グローバルな教育拠点」のあり方です。各国から優秀な学生を迎えとともに
学生の海外派遣などを拡充して、地球規模の人材交流に取り組んでいます。

■ プロジェクト

英語授業プログラム

英語による授業だけを履修して卒業できる学部レベルのプログラム。留学生と日本人学生向け。専門科目を取り入れつつ国際教養に重点を置き、グローバル時代に即応した「世界を舞台に」活躍する人材育成を目指す。

英語副専攻プログラム

英語による授業で構成される科目群から必要単位を履修する学部生用の副専攻プログラム。希望者による登録制。英語圏の協定校への短期留学が必須となる。卒業時に履修したことが各種証明書に記載される。

双方向高画質 遠隔教育システム

インターネットを利用した遠隔教育システム。YNUと海外拠点を結び単位互換を伴う授業を開講する。一度に複数の拠点遠隔地とやり取りができ、入試の際の面接にも利用される。

循環型 プラットフォームの開発

授業で用いられる教材や研究用素材を利用するコンテンツ(動画、音声を含む)の全学的データベース。実際の教育・研究現場から上がってくる「生きた」要素を盛り込みながら循環する。自主教材としても用いることが可能。

国際みなとまち 大学リーグ

YNUに事務局を置く学術コンソーシアム(Port-city University League)。欧州、中東、アジア、北米、南米の11カ国12大学が加盟。海洋や船舶、港湾に関する国際セミナーを毎年各国持ち回りで開催している。

短期留学生の受入れプログラム

JOY&JOY/J Program

横 浜国立大学短期留学国際プログラム(Junior Year Overseas at Yokohama National University: JOY)とは、横浜国立大学と学生交流協定のある諸外国の大学に在籍する学生を短期間受入れ、教育するため1997年10月に開設したプログラムです。英語による教育を受ける機会を提供し、学生交流を活性化し、本学における4つの理念の柱の1つである「国際性」に資することを目的として



神奈川県立市ケ尾高等学校の生徒との交流の様子

しています。2010年春学期には、常盤台小学校の「英語クラブ」に参加し、4年～6年生に英語を教える実習科目「Primary School ESL」を新規開講し、5カ国(アメリカ、カナダ、イギリス、ニュージーランド、フランス)13名の交換留学生(JOYプログラム)が参加しました。



地域の日本語ボランティアと大学の連携のために毎年開催されている

ボランティアと本学教員によるにぎやかなクラス

日本語でボランティア

「日本語でボランティア」は、留学生センター教員有志が行なう日本語ボランティアを対象とした公開講座とその延長線上にある教員と市民ボランティアの連携の名称です。「日本語でボランティア」の実施教室では、講師が事前に渡した授業計画・教材をもとに、養成を受けたボランティアの方々数人が毎回の授業にアシスタントとして参加するというユニークな教育体制を実践しています。留学生側からは「先生が教えられないことを教えてくれる」「いろいろな日本人とたくさん会話ができる」、ボランティア側からは「開かれた大学を感じる市民教育の場」と好評です。

フィリピンからの移民を 研究テーマに

世界中に移住しているフィリピンの人たちを研究するとともに、日本人の父親と会えずに育ってきたフィリピンの子どもたちと母親の支援団体にかかわるなど、学外での活動にも取り組んでいる。

聞き手／剣田亜沙美（教育人間科学部国際共生社会課程 4年）

貧困、環境など国際的な 課題解決を担う人材を育成

——先生はどのようなことを研究されているのでしょうか？

研究分野は「国際社会学」という社会学の中でも新しい分野です。「国境を超える現象を社会学的な手法で分析する」ことを通して、国民国家の相対化を目指してきた領域です。「グローバル化の社会学」と言い換えてもいいと思います。

中でも、人の国際移動とジェンダーにまつわることが研究課題で、特に世界中に移住・移住しているフィリピンの人たちの移動の形や、出身コミュニティ・家族との関係、移動した先の国との関係などの研究を

進めています。

大学院生のころは、海外に出稼ぎに行っているフィリピンの人たちの家族や、香港やシンガポールで住みこみの家事労働者として働いているフィリピンの女性たちの組織について調査しました。

最近は、「国際移動と子ども」というテーマにも関心を持っていて、国際婚外子のアイデンティティや、日本に住む外国籍の子どもたちについての研究をしています。

——先生は、学外での活動もされているとのことですが…。

大学院生のころから、フィリピンで暮らすジャパニーズ・フィリピーノ・チルドレン（JFC）と呼ばれる子どもたちと、その母

小ヶ谷千穂

Chiho Ogaya

教育人間科学部国際共生社会課程 准教授

1974年生まれ。社会学修士。一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了後、日本学術振興会特別研究員を経て現職に。専門は国際社会学。



親の支援団体にかかわってきました。母親たちの多くは日本でエンターテイナーとして出稼ぎしていた人たちで、子どもたちは日本人の父親と会えずに育ってきています。かかわるようになったきっかけはDAWNというマニラの団体で、日本でも仲間と一緒に活動しています。

ここ2年ほどは、横浜市鶴見区の小学校で、フィリピンから転入してきた母語支援が必要な子どもたちの学習支援もしています。

——そうした活動をされる際に、先生はどんなことを思われているのですか？

「この子たちのために!」とか、立派なこととはあまり考えていないんです。私で何かできることがあれば、という感じでしょうか。

JFCやお母さんたちと一緒に過ごすことで、本当にいろいろなことを教わっています。

——最後に、ゼミでの活動について、お聞かせください。

ゼミ活動には、力を入れているつもりです。大学の醍醐味はゼミだと思うんです。幸い、着任してからずっと、熱心で楽しい人たちがゼミに集まってくれて、毎年、和気あいあい、でもじっくり勉強しています。基本的には参加者の関心の共通項をゼミでのテーマにしています。毎年少しずつ違いますが、開発や貧困の問題、都市、環境などに関心がある人が多いですね。

毎年、数人のゼミ生とフィリピンに行って、私が以前からお世話になっている人たちと交流してもらったりしていて、それもうれしく思っています。



中央の小ヶ谷准教授を囲むゼミのメンバーたち。前列左から2番目が聞き手の剣田さん

分野を超えて 新しいマイクロマシン作り

立体的なマイクロ・ナノ構造を自由自在に作製できる
マイクロ光造形法を駆使して、医療や環境エネルギーなど
さまざまな分野に貢献できるマイクロマシンの開発に取り組んでいる。

聞き手／稲田 誠（大学院工学府博士課程後期 3年）



丸尾昭二

Shoji Maruo

大学院工学研究院 准教授

1970年生まれ。博士(工学)。大阪大学大学院応用物理学専攻博士課程修了後、名古屋大学助手などを経て現職。専門はマイクロマシン工学。

幅広い視野を持った国際的な 研究者・技術者を育成

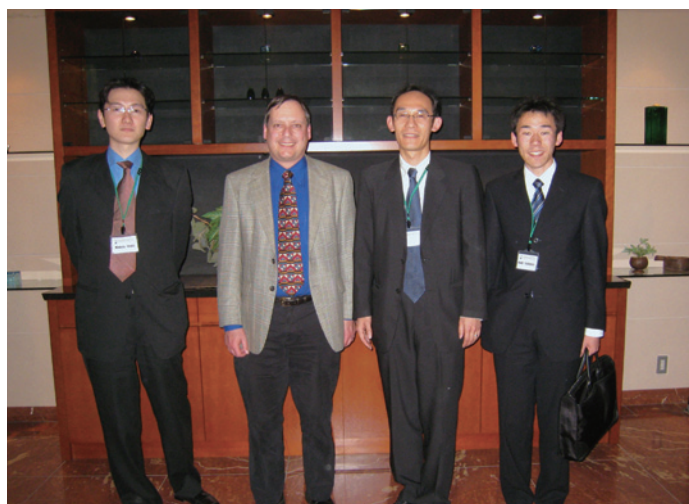
——先生はどのようなことを研究されている
のでしょうか？

レーザー光を用いて微小な3次元構造を作製するマイクロ光造形法という独自技術を用いて、さまざまなマイクロマシンを開発しています。例えば、光の力で動く、大きさが0.01ミリのマイクロポンプを開発しました。このポンプは、ラボオンチップと呼ばれている技術の1つで、従来の大きな分析装置を、指先ほどの小さなチップにすべて内蔵させる夢の技術です。将来的には、病院に行かなくても自宅で簡単に医療診断を行ったり、あるいは薬を合成・放出するチップを体内に内蔵できる時代が来るかも知れません。

——先生は、学生たちにどのような教育・指導をされているのでしょうか？

まず、学生たちには、自分の研究テーマに対して興味を持って、積極的に取り組んでもらいたいと思っています。誰でも面白いと思うことには熱中できます。目的意識を持てば、新しい知識や技術もどんどん身につく、学生たちは自然と成長してくれます。そのためにも、研究テーマが魅力的で夢のあるものになるように努めています。

また、コンピュータによる設計や解析だけでなく、実際に自分の手で物を作るということを重視しています。なぜなら、実験で苦労することで新たな課題が発見でき、実験に成功したときの感動は一生忘れるこ



ナノフォトニクス
国際会議にて
(左から、聞き手の
稲田さん、米国留学先の
メリーランド大学の
Fourkas教授、丸尾准
教授、修士課程2年の
吉村直樹さん)

とがないと思うからです。これらの体験が、卒業後の彼らの自信と探究心につながればよいと考えています。

——先生は、海外に留学されましたが…。

海外留学には、2つの目的がありました。1つは、異分野で研究し、新しい知識と技術を学ぶことでした。マイクロマシンの開発には、機械工学だけでなく、化学やバイオ、材料などさまざまな知識と技術が必要です。そこで、私の専門である応用物理学と機械工学とは異なる化学・生化学学科に留学しました。マイクロナノの領域では、個体や液体の界面現象がとても重要な役割を担うため、物理だけでなく化学の知見と技術が不可欠です。このように分野の壁を越えて幅広く学ぶことで、独創的な研究ができると考えています。

もう1つは、文化や言語の異なる人たちと交流することで、真に国際的な研究者・指導者になりたいと考えました。私の研究

室では、大学院生に積極的に国際会議で発表してもらっています。今回の留学経験を活かして、さらに国際的な感覚と幅広い視野を持った学生を育成できるよう努力していきたいと思っています。

——最後に、研究室の雰囲気について、お聞かせください。

研究室の雰囲気は、明るく元気がモットーです。研究も遊びも、みんなでわいわいやる方が楽しい。研究テーマは1人ずつ異なりますが、テーマの異なる学生同士が議論するのがよいと思っています。私の研究室では、レーザーで加工している横で、細胞を培養している学生がいます。電磁気学、生物学、材料など色々な勉強をしている学生が混在しています。また、様々な分野に就職した先輩と現役生との親交があります。彼らの交流が新しい技術を生み出してくれることを楽しみにしています。

Campus 旬の情報をお届け! News

内覧会を開催

YNU大岡インターナショナル レジデンスがオープン!

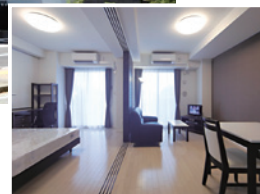
▶ www.ynu.ac.jp/campus/institution/accommodation.html

本学の「国際戦略」では留学生・外国人研究者の受入体制の充実を掲げており、その一環として留学生や外国人研究者の生活を支援するための住居施設「大岡インターナショナルレジデンス」を竣工しました。

「大岡インターナショナルレジデンス」は、入居者同士の国際交流の活性化をテーマとして、学生・研究者及び職員のための異文化共生ハウスで、また、大学の自己負担なく民間事業者の資金により大規模な



イチイコーポレーションのサイト
▶ tokyoeasyrent.com/residence
でも確認できます



宿舎を整備・運営する手法を用いており、全国の大学関係者等から注目を集めています。

■施設の概要■

- (1) 構造規模等: RC6、延べ床面積8,476.83㎡
- (2) 部屋数: 留学生用252室、外国人研究者用23室、教職員用36室

名誉博士学位記の授与

サンパウロ大学タチバナ教授に 名誉博士号授与

5月22日(土)、サンパウロ大学タチバナトシイチ教授に対して横浜国立大学名誉博士の称号授与式を行いました。

タチバナ教授は、昭和49年に本学大学院工学研究科を修了し、サンパウロ大学等で教鞭をとり研究指導する傍ら35年以上の長きにわたって横浜国立大学の工学分野だけでなく経済学・経営学・教育学の分野においても学生・教員の交流を積極的に推し進め、大学間交流協定および学生交流協定締結の礎を築きました。また、サンパウロに横浜国立大学同窓会を設置し、本学リエゾンオフィス開設等にもご尽力いただきました。現在は、リエゾンオフィサーとしてもご活躍いただいています。これらの多大な業績および本学への貢献に対し、同氏へ名誉博士の称号授与することが決まりました。



本学にとり、タチバナ教授は12人目の名誉博士となる



平成22年度学長主催

「外国人研究者・留学生 夕涼みの会」を開催

7月15日(木)、毎年恒例の外国人研究者・留学生合同のパーティを開催しました。本学で学ぶ留学生と日本人学生、外国人研究者と本学教職員が第1食堂れんが館に集まり、和気あいあいとした雰囲気の中で親睦を深めました。

当日は、今年のテーマ「夕涼み」にちなんで、焼きそば、かき氷、お寿司等の縁日風ミニ屋台も設け、日本の夏の風情を感じることができました。また、留学生による祖国の民族舞踊、本学民謡研究合唱団による和太鼓など、国際色豊かな演目も披露され、大いに盛り上がりました。さらに特別企画として、教育人間科学部 薩本弥生准教授と学生の協力のもと「ゆかた着付け体験と記念写真撮影」のイベントを開催しました。参加した多数の外国人研究者や留学生は、男性も女性も慣れない浴衣と下駄にとまどいながらも、清々しく艶やかな浴衣姿に、満足した様子でした。



建築界のノーベル賞を受賞

快挙！ 西沢教授が 2010年「プリツカー建築賞」を受賞

大学院工学研究院の西沢立衛教授が、アメリカのハイアット財団が主催する2010年の「プリツカー建築賞」を建築家の妹島和世氏と受賞することが決まり、5月17日(月)にニューヨークのエリス島で授賞式が行われました。同賞は「才能、先見性と献身」を示す作品をもつ建築家に贈られるもので、建築家に与えられる最高の栄誉として「建築のノーベル賞」とも言われる世界的に権威あるものです。この賞を日本人が受賞するのは1995年の安藤忠雄氏以来4人目となっており、日本のほか、ドイツ、英国、スペイン、フランス、オランダ、米国で行っている共同建築プロジェクト「SANAA」が評価され今回の受賞につながりました。西沢教授はSANAAの建築デザインのコンセプトを「開かれた建築」としており、設計をする際は自分の主張だけでなく、

「周辺環境」や「誰がどう使うか」ということを重要な柱だと考え、その場所に合うということを重視して設計を行っています。

また、西沢教授は21世紀の社会的課題に応える環境包括デザインを創生し得る、幅広い視野と問題解決能力を持った高度専門建築家の育成を行っている本学の建築都市スクール「Y-GSA」での指導も行っており、建築家の育成にも力をいれています。



西沢立衛 Ryue Nishizawa

大学院工学研究院 教授

1966年生まれ。横浜国立大学大学院工学研究科修士課程修了後、妹島和世建築設計事務所入所。2001年より本学助教授、2010年より教授に。専門は現代建築の設計と研究。



Y-GSA内で学生に指導する西沢教授。熱心に討論が交わされる

産学官連携活動の推進に貢献

山田副学長が産学官連携功労者表賞「国土交通大臣賞」を受賞!!



上／米国のフーバーダム下流の
渓谷で視察中の山田副学長
右／国土交通大臣賞の授賞式にて



山田均副学長が国土交通分野における科学技術の振興の視点から大学、公的研究機関、企業等における産学官連携活動の推進に多大な貢献が認められた者に授与される「国土交通大臣賞」の平成22年度の受賞者に決定しました。

本受賞は、米国のフーバーダム下流に位置する急峻な渓谷において、北米最大の支間長323mを有し、世界初となる鋼製ストラット付きコンクリートツインアーチ構造のコロラドリバー橋を、仮設ピロンを用いた斜吊り張出し工法で実現したことが、評価されたものです。

また、歴史的構造物であるフーバーダムと同一素材のコンクリートアーチ橋の架橋により、新たな景観創出と観光資源としての価値を向上させたこと、物流ルートと観光ルートを分離することで、慢性的交通渋滞を緩和し、地域経済の活性化に寄与したこと等も高く評価されました。長年にわたる企業との連携活動の結果が今回の受賞になりました。

山田 均 Hitoshi Yamada

副学長／大学院環境情報研究院 教授

1955年生まれ。工学博士。東京大学大学院工学系研究科博士課程中退後、本学工学部助教授、同教授、環境情報研究院教授を経て、2009年副学長に就任。専門は土木工学。



新聞

NEWS PAPER

- 研究に使う特殊な装置を求めていた大学院環境情報研究院 多々見純一准教授は、試験装置メーカーの精光技研に生産を依頼、共同開発が実現した。新たな産学連携の形として期待される。(2009.12/17 神奈川新聞)
- 第12回ベネチア・ビエンナーレにおけるベネチア建築展の日本館に、大学院工学研究院北山恒教授がコミッショナーとなり、西沢立衛准教授が出演する。(12/17 読売新聞)
- 「企業と生物多様イニシアティブ(JBIB)」シンポジウムのパネリストに大学院環境情報研究院 松田裕之教授が参加した。(12/18 日本経済新聞)
- 経営学部3年の吉田恵さんは、先輩の経営学4年 三宅文さんからもらった「就活ノート」を頼りに就職活動を始めた。横浜国立大学では、4年前から内定者が後輩の相談に乗る「キャリア・サポーター」に力を入れる。就職支援係の吉澤由貴さんは「今年の相談者数は例年の倍近い」という。(2010.1/8 朝日新聞)
- 教育人間科学部附属鎌倉中学校 岡部厚子教諭が平成21年度文部科学大臣優秀教員に表彰される。(1/17 神奈川新聞)
- 大学院工学研究院 平山次清教授らは、従来の10分の1の重さで波の来る方向も分かる波浪計測用小型ブイを開発した。(1/17 日刊工業新聞)
- 7大学連携「横浜文化創造都市スクール(北仲スクール)」を4月に開校、これに合わせ、新進気鋭の映画監督の作品を集めた上映会が行われる。北仲スクール代表である教育人間科学部 室井尚教授は「国の事業仕分けで予算は削られたが、色んなことに取り組み、続けて行きたい」と期待を込めた。(1/22 東京新聞)
- 横浜国立大学が昨秋策定した「4大方針」が、今年度中に学部ごとの目標を定め、新年度から実践する予定。(1/22 読売新聞)
- 大学院工学研究院 水口仁教授らは、半導体の熱活性を使って揮発性有機化合物(VOC)やたばこの煙、ディーゼル排ガスなどを分解する空気清浄システムを開発した。(1/22 日刊工業新聞)

- 大学院工学研究院 河野隆二教授のインタビュー記事掲載。(1/27 神奈川新聞)
- 電子マネーの子どもの利用について、教育人間科学部 西村隆男教授がコメント。(2/16 朝日新聞)
- 横浜国立大学グローバルCOEプログラムと未来情報通信医療社会基盤センターが主催する「2009年度医療ICTシンポジウム」が開かれ、国内外の研究者らが参加、研究開発の最新動向や成果発表、実用化に向けた課題に関する意見交換などが行われた。(3/5 神奈川新聞)
- 大学院工学研究院 藤本博志准教授らが4輪駆動型の電気自動車(EV)を開発、「4輪駆動の制御技術を使えば、消費電力の削減と航続距離の延長の2つを組み合わせられる」と、システム改良でさらなる性能向上に取り組む。(3/8 日刊工業新聞)
- 横浜国立大学創立60周年記念国際シンポジウム『大学の世界ランキングを考える』が開催、国内外の大学や企業関係者ら180人が参加した。(3/11 日本経済新聞)
- 経営学部 五十嵐則夫教授が、企業会計の世界的な潮流「IFRS(国際会計基準)」について分かりやすく解説。(3/24 日刊工業新聞)
- 建築のノーベル賞とも言われる米ブリツカー賞に、妹島和世氏と、ユニットを組む大学院工学研究院 西沢立衛准教授が受賞。(3/29 〈夕刊〉朝日新聞 東京新聞 日経新聞・毎日新聞 3/30〈朝刊〉神奈川新聞・産経新聞・SANKEI EXPRESS)
- 読売新聞と横浜国立大学共催の公開講座「YY講座 これからの流域圏を考える」開催のお知らせが掲載される。(4/7 読売新聞)
- 横浜国立大学と国際協力機構(JICA)は連携協定を締結、今年度から政府の地域別研修・アジア「特別支援教育」事業に参加する。(5/14 日刊工業新聞)
- 横浜国立大学への留学生44人が鎌倉建長寺境内にある塔頭回春院で座禅を体験した。(6/2 朝日新聞)
- 読売新聞社が行なっている「大学の實力調査」が発表される。横浜国立大学は総合自己評価(学習・生活・就職支援全般についての自己評価)にて【A=とても成果がある】との

評価。(7/6 読売新聞)

- 横浜国立大学は2011年度から理工学部

テレビ・ラジオ

TELEVISION / RADIO

- 「青春アカペラ甲子園全国ハモネプリーグ」(フジテレビ 1/19) …全国アカペラ大会の地区予選を突破し、最終選考に出場。／学生アカペラサークル stairways(ステアウェイズ)所属のグループボーカルブースター
- 「サンデープロジェクト」(テレビ朝日 1/31) …日本海が様々な有害物質で汚染されており、韓国での廃棄物の海洋投棄がかなり影響していると考えられることに対して、長期間での影響や今後の改善の在り方についてコメント。／大学院環境情報研究院 浦野紘平特任教授
- 「名曲探偵アマデウス」(NHK BS-hi 5/24) …「ワルツ王」ヨハン・シュトラウス2世が作った『美しく青きドナウ』を中心に、彼の生涯と彼が活躍した19世紀のウィーンについて解説。／教育人間科学部 小宮正安教授
- 「名曲探偵アマデウス」(NHK BS-hi 5/24) …J・シュトラウス作曲「美しく青きドナウ」について解説。／教育人間科学部 茂木一衛教授
- 「サイエンスZERO」(NHK教育 4/17) …テーマ「つながる生物の謎 土の中の小宇宙」で、学内の土壌を用いて、土のなかの生物多様性について解説。／大学院環境情報研究院 金子信博教授
- 「学生HEROES!」(テレビ朝日 5/12) …スポーツ美女学生として、100mハードルで日本トップクラスの木村さんを紹介。／陸上部 木村文子
- 「FMサウンド★クルーズ」(NHK-FMラジオ 7/8) …神奈川県内学生のためのコミュニケーションコーナー「かなキャン」に生出演し、キャンパス情報やサークル活動、大学付近の耳寄り情報などを紹介。／国際交流学生ボランティア団体

105(いちまるご)、ビジネスサークル NoN(ノン)

●「参議院議員選挙開票速報」(テレビ神奈川 7/11) …選挙の争点、結果などについてコメント、解説。／大学院国際社会科学部 梶島 洋美准教授

●「ITホワイトボックスII」(NHK教育テレビ 7/22) …テーマ「サイバー犯罪ってどう取り締まる?」の中で、秘密の暗号鍵の入っているチップを壊さずに鍵を読み取る「サイドチャネル攻撃」とその対策技術について解説。／大学院環境情報研究院 松本勉教授

●「おはよう日本」(NHK総合 7/25) …大学生の中退問題をテーマにした企画内で、他大学中退後、横浜国立大学に入学し、充実した学生生活を送っていることについて取材対応。／教育人間科学部 大川雄介

●「情報7days ニュースキャスター」(TBS / BS2 8/7) …2010年8月5日に群馬県で発生したトレーラーコンテナ爆発事故に関してコメント。／大学院環境情報研究院 三宅淳巳教授

●「NEWS ZERO」(日本テレビ / BS2 8/18) …連日の猛暑のため熱中症でなくなる方の多くが「室内」であることを受けて、室内での熱中症の危険性を実際の部屋の中で検証。／教育人間科学部 田中英登教授

●「NHKニュース7」(NHK総合 / BS2 8/18) …2010年7月28日に発生した、ホルムズ海峡における原油タンカー爆発事故に関してコメント。／大学院環境情報研究院 三宅淳巳教授

公開情報についての お知らせ

▶ www.ynu.ac.jp/about/information/salary/pdf/yakusyoku_kyuuuyoh21.pdf

平成21年度の国立大学法人横浜国立大学の役職員の報酬・給与等については上記URLからご確認いただけます。

問い合わせ先／横浜国立大学
総務部人事・労務課給与認定係
(☎045-339-3023)

WEBサイトのスペシャルコンテンツをご紹介します!



グローバルレポート

「Glocal=Global+Local」、グローバルとローカルを足した造語であるグローバルは、その名の通り、世界規模と地域規模の融合を表した言葉です。グローバルレポートとは、すなわち世界規模で物事を考え、地域で実行し、世界へ向けて発信するレポートです。

▶ www.ynu.ac.jp/special/glocalreport

vol.2 現在公開中

深い学びへとつながる「価値ある失敗」を通し
自ら探究心を持って学ぶ楽しさを知ってほしい

宮崎 活志氏

(文部科学省 初等中等教育局視学官)

下城 一

(横浜国立大学教育人間科学部教授)



下城 現在、小・中・高のカリキュラムには、国語や理科といった教科の枠を越えた自主的な学びを生徒に体験させる「総合的な学習の時間」が設けられていますが、横浜国立大学では5年前から、その内容をより充実させるための取り組みを、神奈川県下の高校と連携して実施しています。毎年開催しているその成果発表会に、昨年度は宮崎さんにもご参加いただいたわけ

ですが、どのような感想を持たれましたか。

宮崎 総合的な学習の時間の目標を正しく把握し具現化してくださっていて、たいへん感服しました。例えば、自分の大好きなアイスクリーム・ショップが、どうしても多くの人に知ってもらえ、食べに来てもらえるか、という研究がありましたね。まさに、自らの興味・関心から問題を設定し、その解決方法を追究する姿が見られました。こうした力は、放っておいて身につくものではないし、かといって通常の授業の中で教え込めるものでもありません。この例の場合、マーケティングや経営の分野の話になりますから、高校の先生だけで適切に対応するのはかなり難しいといえます。

下城 そうした専門的な部分で本学がお役に立てればと思って始めたわけです。全体の流れとしては、まず9月ごろに各参加高校から生徒が取り組んでいる研究の内容をいくつか送っていただき、それぞれ専門分野がもっとも近いと思われる本学教員に預けます。研究の方向性や方法はもちろん、レポートのまとめ方、効果的なプレゼンテーションのやり方で細かくコメントしてもらい、それらを高校にフィードバックします。

(対談のつづきはWEBサイトで)

vol.3 近日公開予定

vol.3は、日産自動車株式会社フェロー 久村春芳氏と横浜国立大学工学部長石原修との対談を掲載予定です。乞うご期待!



横浜国立大学WEBサイト リニューアル!

▶ www.ynu.ac.jp

「Gomez大学サイトランキング2010」 総合4位を獲得

「Gomez大学サイトランキング2010」において、調査対象となった全国322校中、本学のウェブサイトは「ウェブサイトの使いやすさ」で13位、「情報の公開度・先進性」では9位にランクインし、総合4位を獲得しました。2010年4月の全面リニューアルが今回の評価へとつながりました。

『Gomez大学サイトランキング2010』 ▶ www.gomez.co.jp



【YNUお宝探訪①】

シャウプ・コレクション(附属図書館所蔵)

「シャウプ勸告」を発表したことで知られる米国の財政学者カール・シャウプ博士(1902-2000年)旧蔵の図書・雑誌・文書類数千点です。文書類の中には、ダグラス・マッカーサーGHQ最高司令官や吉田茂元首相と交わした書簡など、世界に1点だけの歴史的資料が多く含まれています。

横浜国立大学広報誌 第190号

2010年10月20日発行

編集・発行 国立大学法人横浜国立大学広報委員会
〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台 79 番 1 号

YNU編集委員長 山田 均(副学長/大学院環境情報研究院 教授)

お問い合わせ 横浜国立大学 総務部 広報・渉外室
☎ 045-339-3016 ☎ 045-339-3179

アートディレクション 神里僚子(経営学部卒業生)/株式会社リボグラム